

## 相づち使用とターン管理に関する一考察 接触場面の場合

梅木俊輔

東北大学大学院文学研究科

umeki0824@hotmail.com

### 1. はじめに

会話の参加者としての話し手あるいは聞き手は多様な仕方で振る舞い、会話に参加している。相づちは聞き手の振る舞い方の一つであるが、学習者（以下、NNS）の相づちについては従来より、機能、表現形式、タイミング、頻度等において母語話者（以下、NS）の実態と比較した際の違和感や不十分さが指摘され（水谷，1988，伊藤，1993，堀口，1997）、会話教育の指導項目としても取り上げられている（中井・大場・土井，2004）。

ただ従来の研究は、NNSにおける問題の実証を目的とした特定発話の数量的不十分さに関するものが多く、使用される状況について詳述したものはあまり見られない。そのためどういう相づちが必要であるかが分かって、NNSの適切な使用には結びつかないと考える。またNNSの視点からすると、聞き手として相づちのみを発話することは比較的難しいことではない。よって相づちのみで済ませることができる状況についての知識を得ることにより、NNSにとっては負担の軽減につながる事が予想される。

そこで本発表ではNNSの相づちに関し、伊藤（1993）による「バックチャンネル+<sup>1)</sup>」を参考に相づちのみと相づち以外の要素（+の部分）が付加されたものとを区別し、双方の出現状況を比較検討することによって、どういう発話をどういう状況で行うと問題となるのかについて中心に取り上げる。

### 2. 先行研究とNNSによる相づち使用の問題

下の例1および2におけるの部分でNNSはそれぞれ相手の発話に対する反応を示している。

例1

166NNS	あ：あ：好きな歌手とか
167NS	好きな歌手 ジャニーズ
168NNS	あ：わたしも（……）好きですよ
169NS	いいですよね：

## 例 2

059NNS	昨日 空手？
060NS	あ 空手
061NNS	いましたか
062NS	あ いました
063NNS	あ：そうですか：
064NS	h h h いました
065NNS	へ：
066NS	あ いました？

ここで例 1 に比べ例 2 では の後、会話の流れに滞りが感じられる。例 2 の NNS に見られるような反応の示し方について、伊藤(1993)は指導においても簡単なコメントや短い発話を加えた形式(バックチャネル+)を指導することが必要であることを述べている。

では聞き手の発話が相づちのみの場合、常に問題となるのだろうか。この点に関し以下に示す例 3 を見ると NS は聞き手として相づちのみを主体とした発話を行い、バックチャネル+ を行っていない。にもかかわらず例 3 においてはその後の流れに例 2 のような滞りは感じられない。こうしたことからすると例 2 で問題となっていることは単に発話の情報量的不十分さの問題だけではないと思われる。

## 例 3

145NNS	羨ましいね：ほんとに羨ましい 何でかというと：
146NS	はい
147NNS	韓国は今 20 歳代の大学生が多すぎて：
148NS	(うなずく)
149NNS	働いている人があんまいなくて：
150NS	(うなずく)
151NNS	学生達は消費しからないんですね：
152NS	(うなずく)

## 3. 研究の内容

## 3.1 目的

以上の内容から、常に相づちのみが問題となり、バックチャネル+ をいつでもどこでも発話しなければならないわけではないことが分かる。では相づちのみで問題となるのはどのような場

合であり、またなぜ問題となるのだろうか。以下、これらの問いに答えることを目的とした考察について述べる。

### 3.2 分析データ

初対面同士 1 対 1 による日本人大学生 (NS) と韓国人大学生 (NNS) の自由会話 13 組 (1 組 20 分程度) を録画し文字化した。NS は 20~22 歳の男女 (男 2 名 : 女 11 名)、NNS は韓国の大学に在籍する 20~22 歳の男女 (男 2 名 : 女 11 名) である。NNS の日本語レベル<sup>2)</sup>については中級 5 人、上級 8 人である。

### 3.3 考察

上記例 1 および 2 のように一方が他方に質問し、他方がそれに応答するという形で会話が進行する発話連鎖の型をここでは情報要求の発話連鎖とする。これに対し、例 3 では一方が自ら開始した (質問により要求されたわけではない) 陳述を他方が聞くという陳述の発話連鎖となっている。こうしたことから相づちのみの使用が問題となるのは情報要求の発話連鎖であることが考えられる。ではなぜ情報要求の発話連鎖で NNS が相づちのみを発話することにより問題が生じるのか。

結論を先に述べると、ターンを管理すべき位置にいる者がターンを管理する発話をしなかったためである<sup>3)</sup>。例 2 において相づちを打たれる NS 側から考えてみると、相手の情報要求 (061NNS) に対してターンをとって応答を行っているが (062NS)、その応答に対し、本来応答の受け手がターンを管理するはずの位置で相づちのみが発話され (063NNS)、スルーされた格好になっている。ここでいうスルーとは下の例 4 のように、NS が行った応答に対しさらに情報要求を行うような明示的なターンの渡譲のことではない。

#### 例 4

108NNS	札幌で何かおいしいものとか有名なもの
109NS	そうですね :
110NNS	ラーメン
111NS	h h h ラーメン ジンギスカン
112NNS	ジンギスカンおいしいですか
113NS	ちょっと苦手なんですけど :

明示的なターン渡譲を行うことはターンを管理しているのであって、ターンを取らないこと自体が問題なわけではないのである。すなわち例 2 では相づちのみを発話することがターンを管理することにならないため問題となっている。

例 2 に戻ると、NS は相手がターンを管理するよう応答の繰り返しによって再試行するものの

(064NS) やはり相手にスルーされるため(065NS) ここでは明示的なターンの渡譲を行うこと  
によって(066NS) ターンの管理を代行せねばならなくなったと思われる。

一方、陳述の発話連鎖である例3は、相づちが打たれる NNS 側からすれば自分の陳述(145NNS、  
147NNS、149NNS、151NNS)に対し、相手が勝手に相づちを打っているだけで(146NS、148NS、150NS、  
152NS) ターンの管理をするべき位置にいる者が相づちを打っているのではない。永田(2004)  
は質問に対する応答の発話途中で打たれる相づちについて、それが反復的なものでなく単独的な  
ものであり、かつ概念的な相づち(例：あーそうですか)であるとき、「当面の求める情報は得  
られたが、相手からさらなる情報を得ようとする場合に、あいづちという聞き手役割としての言  
語行動を利用して、相手に turn をとらせ続け、相手からの情報提供を円滑に実現させる役割を  
果たしている」(永田, 2004, p. 60.) と主張している。永田の主張を踏まえると、例2では質  
問の応答者が、発話途中でなくポーズ時に相手から聞き手役割としての立場を思いかけず明示さ  
れたとも言えるだろう。

#### 4. まとめと今後の課題

以上をまとめると、情報要求の発話連鎖における応答に対し、ターンを管理すべき者が相づ  
ちのみを発話した場合、相づちのみはターンを管理する発話ではないため、その後の会話は滞る  
ということである。ただ今回の発表内容については情報要求の発話連鎖でない場合として、陳述  
の発話連鎖の場合しか検討していない。そのため陳述の発話連鎖の場合以外の検討を含め、ター  
ン管理の実態を明らかにしていくことが今後の課題である。

#### 注

- 1) 伊藤(1993)は次の5種類をあげている。a.相づち詞の繰り返し、b.「ええ、そうです」の変種、c.  
話し手の言葉の繰り返し、d.バックチャネルの後に短い発話が続く形式(変化させた繰り返しを含む)  
e.繰り返しに短い発話、あるいは聞き返しを付け加えた形。
- 2) NNS は全員、筆者所属研究室で行われた夏季日本語講座の参加者であり、その際の参加クラスをその  
ままレベルとしている。
- 3) 発話連鎖位置と発話との関連について名嶋義直准教授(東北大学)より、会話の終結部において終了  
のサインを送った側が相手からの同意に対し相づちのみを発話し、それにまた相手側が相づちのみを  
打つというように「会話の流れが滞る」だけでなく「会話が終わらない」例があることについてご助  
言をいただいた。

#### 参考文献

- 林宅男(編著)(2008)『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社。  
堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版。  
伊藤博子(1993)「談話の指導：バックチャネルからの展開」『日本語学』12(3), 明治書院, pp. 78-91.  
水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7(13), 明治書院, pp. 4-11.  
永田良太(2004)「会話におけるあいづちの機能：発話途中で打たれるあいづちに着目して」『日本語教  
育』120, pp. 53-62.  
中井陽子・大場美和子・土井眞美(2004)「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案：談話・会話  
分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』14, pp. 75-91.  
ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析：勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版。